

## 森永 徹さん(元・純真短期大学講師 医学博士)の講演

森永さんは「人口動態統計」や各種文献をもとに九州の玄海原発がある玄海町や隣接の唐津市で白血病による死亡率が増加していることを明らかにされました。(下図)

その原因が運転中の原発から放出されるトリチウム(放射性水素、玄海原発が全国一放出量が多い)にあることを示されました。

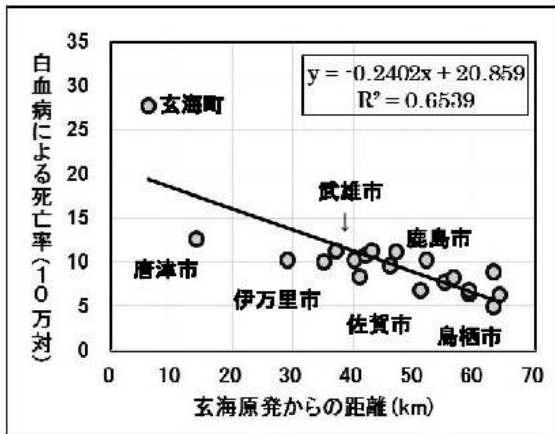


図2) 佐賀県自治体の玄海原発からの距離と白血病死亡率(稼働後)

原発から排出される放射性廃棄物について濃度規制はあっても総量規制はなく、薄めればどれだけ排出してもよいことになっています。(福島原発事故の汚染水からトリチウムを除去できないので、薄めて海洋放出すればよいという原子力規制委員会の考えの基になっています。)

トリチウムは、世界各国の原発周辺で健康被害をもたらしており、生物濃縮され、DNAを損傷させるという脅威も、講演の中で明らかになりました。

そして核関連施設が集積する青森県六ヶ所村では、2006年から使用済核燃料を用いて施設の性能を確認するアクティブ試験が実施されました。それでトリチウムの放出量が激増(2007年では玄海原発の約18年分を放出)し、六ヶ所村でも白血病死亡数が増加する傾向がみられると報告されました。

まさに、原発は国民の健康とは相いれないものであることがよくわかりました。(S)

## 市川章人さん(京都自治体問題研究所)の講演

市川さんは、まず原子力規制委員会がブレーキではなく再稼働申請をことごとく認可する暴走アクセルになっていることを批判されました。「新規制基準」が「絶対的な安全性は達成できない」という立場で、放射性物質が外部の環境に放出されることも「相対的安全性の内だ」とする

私たちの命と生活を考慮しないものになっていることを示されました。

そして世界的にも、ベトナムや台湾などで原発撤退の方向に向かい、原発建設費も高騰し、原発を推進することがますます困難になっている状況がよくわかりました。

さらに、原発が連続大地震に耐えられるか疑問が出ていること、火山の破局的噴火の影響が新たな問題として示されていることを示されました。特に、京都北部の若狭の原発にもかかわる日本海側の「海底地すべり津波」の問題(左図)がクローズアップされ、現在の津波対策では全く不十分であることを明らかにされました。

最後に、自治体が立地自治体並みの安全協定を締結し、原発再稼働への同意権(=拒否権)をもつことの重要性和、それを求める運動をおこしていくことを提案されました。

